

六朝期における離別詩の形成（上）

—— 鮑照による離別詩の發見まで ——

松 原 朗

（一）

中國の詩の歴史は、詩經にまで遡る。とはいっても詩がそれからは斷絶することなく持續的に作られるようになるのは、いわゆる建安文學以後のことである。作品が個人の作者の名とともに伝えられること、主要な詩型が五言詩となっていたことも含めて、この建安期の詩が、唐詩へと登りつめてゆく中國古典詩の直接の源流であることは、いわば文學史の常識となっている。しかも、例えば盛唐の李白が詩の改革を唱えたときに、⁽¹⁾範を詩經や楚辭にではなく、端的に建安の文學に求めたことは、當時の實作者においてすでにこのことがはっきりと認識されていたことを示すものとして興味深い。しかしこのことが事實であるとしても、唐詩に親しむもの

が、唐詩を基準として建安の詩を読むならば、そこには餘りにも異質なものが多くことに氣付くのである。本稿で取り上げる離別⁽²⁾の詩の場合も、その例にもれない。

唐詩の數あるジャンルのうち、⁽³⁾王維の陽關三疊で知られる「送元二使安西」、李白の「送友人」などひとときわ愛唱される作品が集まっているのが離別の詩である。また唐代の離別詩は、多くの名作をその中にもつだけではなく、それを支える大きな裾野⁽⁴⁾の作品量をもっていた。例えば孟浩然、王昌齡、岑參、高適といった盛唐期の詩人の場合、おおよそ全作品の四分の一ほどが離別詩によつて占められている。⁽⁵⁾これは數ある他のジャンルの作品を壓して、最も大きな割合を占めるものである。しかし建安期の詩人の場合は、質量ともにこのような情況にはなかった。詩題によつて明らかに離別を主題

とすると認められる詩を示すならば、⁽⁵⁾

徐幹 於清河見挽船士新婚與妻別詩

應瑒 別詩二首

曹丕 見挽船士兄弟辭別詩

曹植 送應氏詩二首

離友詩三首

離友詩（殘句）

離別詩（殘句）

に限られている。ちなみに建安に續く阮籍、嵇康ら正始の詩人たちを加えても、しかし彼らは離別の詩を一首も傳えていないので、ここに掲げた七題（十一首）が魏一代のすべての離別詩なのである。およそ二百首の詩をのこした王昌齡が、ひとりで四十九首の離別詩を書いたのがいわば平均的であった唐代とは、事情が大きく異っているのである。

従って、ここで一つのことを豫め確認しておいてもよいだろう。すなわち、離別を主題とする詩が、ともすれば中國古典詩の濫觴期からすでに離別詩という一つの安定したジャンルをなすほどに多作されていたと考えがちであるが、これは

事實に反すること。つまり、離別詩というジャンルは、建安よりも後、主に六朝時代において形成されたものなのだと言うことである。

(二)

しかし、人が詩を作るのは、たとい「詠懷」とよばれるような獨白的抒情詩の場合であっても、つねに、自己と切り離しえない他者との關係の中で、その他者に向って呼びかけることである。その構造は、超越な他者に向けられる祈りとよばれるべきようなものであっても、爲政者に對する怨嗟であっても、友人への友情の確認の場合であっても同じである。そしてこのことを、詩はその他者に呼びかけずにはいられない衝動によって作られるものと言ひ換えるならば、要するに詩とは、他者との關係の斷絶を恐れることから出發すると言つてもよいのであろう。

詩がこのようなものである以上、別れがたい他者との別れの悲しみを詠じる離別の詩は、詩を作る營みとともに根源的であり、おそらく詩の歴史とともに古いと考えて差し支えなからう。事實、中國の詩に即して見るかぎり、離別の悲しみを詠ずる詩は、最古の詩を集めた詩經にまで遡ることができ

る。例えば、^{とつ}婦^{むすめ}ぎゆく女を送って作られた「燕燕」（邶風）などは、すでに中國古典詩を代表しうる離別詩の佳篇となっている。

このように考えるならば、建安の詩人たちにも、あるいは友情をこよなく重んじた彼らであればこそ、友人との別れをうたった離別詩を多くのこしていてもよさそうに思われる。しかしそうした作品は、明らかに離別の詩と知れる詩題を取っていないために、見のがされてしまうのだと。このような豫想をもちながら建安の詩を讀んでゆくと、「贈」」「答」という詩題を取る贈答詩の中にも、しばしば離別の哀情を寫した部分が隠れているのを見出だすことができるのである。

贈五官中郎將詩四首（其二）劉楨

余嬰沈痼疾 余れ沈痼の疾に嬰りて
 竄身清漳濱 身を清漳の濱に竄せり
 自夏涉玄冬 夏自り玄の冬に渉り
 彌曠十餘旬 彌く曠きこと十餘旬
 常恐遊岱宗 常に恐る 岱宗に遊びて
 不復見故人 復た故の人を見ざらんことを
 所親一何篤 親しむ所は一えに何ぞ篤き

六朝期における離別詩の形成（上）（松原）

步趾慰我身 趾を歩びて我が身を慰めぬ
 清談同日夕 清談して日夕を同じくし
 情盼綈憂勤 情もて盼て憂と勤とを綈べぬ
 便復爲別辭 便ち復た別れの辭を爲げて
 遊車歸西隣 遊車もて西隣に帰らんとす
 素葉隨風起 素き葉は風に隨いて起り
 廣路揚埃塵 廣き路には埃と塵と揚がりぬ
 逝者如流水 逝く者は流るる水の如し
 哀此遂離分 此に遂ち離分せんことを哀しむ
 追問何時會 追て問う 何れの時にか會せんと
 要我以陽春 我れを要つに陽春を以てせり
 望慕結不解 望み慕いて結ばれ解けず
 貽爾新詩文 爾に新たな詩文を貽らん
 勉哉修令德 勉めよや 令德を修め
 北面自寵珍 北面して自から寵珍せよ

この詩は、劉楨が、自分の病氣を見舞いに立ち寄ってくれた五官中郎將曹丕に贈ったものである。そしてひと時の歡談を終えて帰ってゆこうとする曹丕に向けて、この詩は限りない惜別の情を吐露している。離別の詩として讀んでも、違和

感を覚えることはないだろう。

このような詩も併せて考えるならば、建安期には離別を明らかに示す詩題をもつ作品（狹義の離別詩）こそ少ないが、實質的に離別を詠じた詩は必ずしも少なくないと言うことができそうにも思われる。

しかしこのことに性急に判断を下すまえに、もう一度、この詩を観察しなければならぬ。

この詩の理解の便宜のために連作四首の要點を記しておく⁽⁶⁾と、第一首は兩者のかつての交遊、第二首がこの詩で、再會とさらなる離別、第三首は以前不眠の夜に曹丕を懷しんだことの回想、第四首はその夜に曹丕の行樂を想像したこととの回想を、それぞれ述べている。述べられた内容によって時間の順序にならべるならば、其一、其三、其四、そして現在のことを述べる其二という展開になるだろう。

こうした連作全體の構成を念頭において、次にここに取り上げた其二について、段落を逐ってさらに内容を分析してみたい。

第一段（1～6句） 漳水のほとりで十ヶ月あまり病床にふ

せり、君に會えぬまま死ぬのではないかと心配した。

第二段（7～10句） 君はわざわざ私を訪ねて、一日中、歡

談してくれた。

第三段（11～16句） 君は帰ることになり、これでもう生きて君に會うことはないと思う。

第四段（17～22句） しかし君は來春の再會を約してくれた。そこでこの詩を贈って君への友情の思いを述べる。

詩は、病臥↓交歡↓離別↓再會の約束、という順序で展開している。確かにこの詩には、離別の哀傷が底流し、それが一篇の基調を作っている。離別の情は、さきに豫想された通り離別の詩以外においてもこの様に表現されているのである。しかしそれにも拘らずこの詩には離別には括り込めないいくつかの要素も詠み込まれており、従って嚴密には、この詩を離別を主題とした作品と決めることはできないであろう。考え方によれば、再會への期待を表明した詩とも讀めるにちがいない。つまりこの詩は、離別の要素を濃厚に含みながらも、純然たる離別の詩では決してないのである。

さらにこの詩を單獨に取り出すのではなく、この詩を含む連作の四首を一つの作品として見るならば、離別の要素はいっそう相對化されて、小さな部分に限定されてしまうだろう。

建安期のこうした贈答詩は、端的には、友情を確認しあうために作られた詩なのである。過去のある時點で始まった友

情は、そのまま現在に至り、そして未來へといつまでも持續することが期待されている。友情の確認とは、これらのすべての段階において友情を認めあおうとする願望、と言い換えてもよいだろう。こうした贈答詩に、かりに離別が詠み込まれていたとしても、それは過去から未來へと續く交遊の一齣、一斷面として描かれるにすぎないかのである。

こうした贈答詩の性格は、曹植の「贈白馬王彪詩」にもあてはまっている。この詩は、その序によって、白馬王に封ぜられた異母弟の曹彪との別れを數日後にひかえて、曹彪に贈られた詩であることがわかる。従って、詩には離別の哀傷を感じずにはいられないような切迫した情感が漲っている。しかし、離別の情を直截に詠じているのは、全部で七段に分けられるこの長篇詩の最後の一段に限られている。やはりこの詩も贈答詩であって、離別をのみ取り上げて主題とする詩、つまり離別詩とはなっていない。

このように觀察してみると、贈答の詩に離別が詠み込まれ、しかもそれが作品のたんなる付け足りではない重要な部分となっていて、しかしその場合でも、その詩を離別の詩と見做すことができないことがわかってくる。贈答詩はあくまで贈答詩であって、離別詩とはなりえていないのである。

六朝期における離別詩の形成（上）（松原）

ここにおいて詩題のもつ意味の重さが改めて認識されてくる。詩題こそは、その詩の制作意圖と直截に對應する部分だからである。しかも建安の詩人たちが離別の詩題を知らなかった譯ではない。事實、曹植には「送應氏詩二首」という、これが離別を主題とする詩であることを明示する詩題を持った作品も存在している。このように考えるならば、劉楨が「贈五官中郎將詩四首」を作り、曹植が「贈白馬王彪詩」を作ったその中に離別の哀情を述べることがあっても、しかし作品總體としては離別詩になっていないことの意味が、いっそうよく納得されるのである。つまり、彼らはこれらの詩を、そもそも離別詩としては作ろうとしていなかったのである。

離別を主題とする作品の絶對數が少なく、その一方で、贈答詩系作品の中では離別の要素が主題としての扱いをうけないうまに潜在している。いいかえれば、離別の要素が、離別詩として結晶しきれずに他の要素と未分化のままに多くの作品に埋没している。このような情況は、離別詩を形成史的に見る立場からすれば、建安期において離別詩が、例えば贈答詩に對して、まだ十分に詩の獨立したジャンルとして確立されていなかったと言うことを意味するものである。そして建安期以後、六朝期における離別詩の形成は、基礎的な部分で

は、それまで多様な作品の中に未分化のままに潜在していた要素をくまなく析出して、いかに離別詩へと組み變えてゆくかという過程と重なってゆくのである。

離別の情を詠ずる詩は、一般に、おそらくその詩の歴史とともに古いと言えるであろう。それほどに離別の詩は、詩を書くこうとする情熱の本源にねざしている。しかし古くからすでに離別詩が存在していることと、離別詩が詩の展開の歴史の中で一つのジャンルとして確立されていること——つまり離別詩が、離別詩と自覺されつつ作られ、そこに多くの作品が蓄積されること——とは別の次元の事柄なのである。この意味では、離別詩は、建安期においてまだあくまでも萌芽状態に留まっていたと言わなければなるまい。

(三)

前節において、建安期には離別を主題とした（離別を明示する詩題をもった）作品がごく少数であること、また離別を主題とはしない贈答詩の中にしばしば離別の要素が混在していることを見てきた。そしてこの二つの事實は、相俟って、建安期にはまだ離別詩が一つのジャンルを成すほどに確立されていなかったことを示すものであった。

ところで、このことは何を意味するのであろうか。むしろこのことは、たんに離別詩の作品数が少ないことを意味するのではない。むしろこれは結果であり、こうした結果を導いた原因を考えなければならぬ。

ここで一つの推測をしてもよいだろう。あるジャンルに作品が多く蓄積されるのは、そこに作品を書きやすくする條件があるからである。つまり、まず離別詩の制作をうながす離別の事件そのものが少なからずなければならぬ。また作り手の側にも、離別詩を仕立てるべくある決まった作法、表現の型（様式）があれば、それだけ作りやすくなるはずである。ところが離別の事件が建安期に少なく、唐代にひときわ多かつたとも考えにくい。とすれば、建安期に離別の詩が少ないのは、主に後者の原因によると考えるの適當がではなからうか。

こうした視點から建安の離別詩を考察しようとするとき、便宜的に、離別詩が多作され詩の一ジャンルとして確立されていた唐代の離別詩を基準に据えて、これとの異同を検討するのが有効であらう。

では唐代離別詩の様式的特徴は、どこに求められるであらうか。離別詩の様式は、誰の、誰との別れを、どのような情

況（時場）に即して描くか、という形で示すことができるだろう。そしてこれに従って唐代離別の様式をつとめて定式化して示せば、作者自身の、友人との別れを、別れの事件があったその時、その場の情況に即して描く、ということになるであろう。實例をあげよう。

送元二使安西 王維

渭城朝雨浥輕塵 客舍青青柳色新

勸君更盡一杯酒 西出陽關無故人

送るのは王維自身、送られるのは王維の友人である元二。そして兩者の別れは、その別れの事件が起こる當の時と場、すなわち春の渭城に即して描かれている。

この詩について、實はこうした説明は、自明にすぎて不要なほどである。そして大部分の唐代離別詩においても、こうした説明が不要となるほどに先の様式は明晰な形をとって徹底されている。念のために、さらに二首を示しておく。

芙蓉樓送辛漸 王昌齡

寒雨連江夜入吳 平明送客楚山孤

六朝期における離別詩の形成（上）（松原）

洛陽親友如相問 一片冰心在玉壺
金陵酒肆留別 李白
風吹柳花滿店香 吳姬壓酒喚客嘗
金陵子弟來相送 欲行不行各盡觴
請君試問東流水 別意與之誰短長

後者は古體詩で、留別、つまり送られる側の李白が、別れに際して自分を見送ってくれる金陵の子弟に贈った詩である。しかし詩型の違いによらず、また送別と留別との違いにもよらず、離別詩の基本的な様式はしっかり守られている。

* なお念のために付言すれば、離別詩の様式はこの一つに限られるものではない。唐代離別詩においても、この様式を踏み破っている作品を容易に見付けることができる。しかし離別詩を形成史の観点から考察しようとする本稿においては、唐代離別詩の大勢がここにあり、また六朝離別詩が様式上の試行錯誤を繰り返しながらも、大勢としてここに向かって収斂していった事實を重視せざるをえない。上記の唐代離別詩の様式を、さかのぼって六朝離別詩の分析基準として援用するのは、こうした理由による。

では、このような安定した様式をもつ唐代離別詩に對して、建安の離別詩はどのような特徴を示しているのであらうか。具體的な作品について見ることにしたい。

送應氏詩二首（其二）

曹植

清時難屢得 清時は屢しば得ること難く
 嘉合不可常 嘉會は常なるべからず
 天地無終極 天と地とは終し極みなきも
 人命若朝霜 人の命は朝の霜の若し
 願得展嬋婉 願わくは嬋婉を展ぶるを得んも
 我友之朔方 我が友は朔方に之かんとす
 親昵並集送 親昵は並な集い送りて
 置酒此河陽 此の河陽に置酒せり
 中饋豈獨薄 中饋は豈に獨り薄からんや
 賓飲不盡觴 賓の飲むも觴を盡さず
 愛至望苦深 愛むことの至りて 望み苦た深し
 豈不愧中腸 豈に中腸に愧じざらんや
 山川阻且遠 山川は阻くして且つ遠く
 別促會日長 別れは促るも會う日は長かなり
 願爲比翼鳥 願わくは比翼の鳥となり
 翩翾起高翔 翩翾を施げて起ちて高く翔らん

この詩は、應氏（經歷不詳）の旅立ちを見送って作られた連作の第二首である。ちなみに第一首は、後漢末の内戦によ

って焦土と化した洛陽一帯の情景を「洛陽何寂寞、宮室盡燒焚」というように描寫して、この中で親友と別れることの悲しみを述べる。ただし、作品の重點はあきらかに洛陽の情景描寫にあり、離別の辭は、次の第二首を起すためのいわば付け足りにすぎない。

第二首では、まず、人生は短く、平和な時も少ない。だから君と交歡したくとも、なかなか願いはかなえられないと前置して、河陽（洛陽北方）での送別の宴と、離別の感慨とを述べる。「人命若朝霜」の句にみられるような無常觀が、いかにも漢魏期の詩らしい趣きをつくっていると言えるだろう。用語も、唐詩に比べればいかにも古風なところがある。

ところがこの詩も様式という觀點からすると、唐代離別詩と同様の様式を踏んでいることがわかる。送るのは作者自身、送られるのはその友人である應氏。そして河陽の地で催された送別の宴。その一回的に體驗される事件に即して、離別の哀情が述べられている。

しかし、このような條件を備えている離別詩は、建安期にはこの一首のみであり、またこれに續く正始期や兩晉の時代を含めても、ごく少数にとどまっているのである。

では次に、同じく曹植の手に成る「離友詩三首」を見てみ

よう。

離友詩三首（其二）

曹植

涼風肅兮白露滋
涼風肅くして白露^{しげ}滋く

木感氣兮條葉辭
木は氣に感じて條葉^お辭つ

臨淥水兮登崇基
淥水に臨み崇基に登り

折秋華兮采靈芝
秋華を折り靈芝を采り

尋永歸兮贈所思
永歸を尋めて思う所に贈らん

感離隔兮會無期
離隔に感ずるも會うに期無し

伊鬱悵兮情不怡
伊に鬱悵^こして情^{たのし}怡まず

この詩には「郷人有夏侯威者、少有成人之風。余尙其爲人、與之昵好。王師振旅、送余於魏邦。心有眷然、爲之隕涕、乃作離友之詩」という序がそえられている。曹植が魏都に帰るときに、夏侯威というものが見送ってくれた。名残りを惜しむあまりこの離友詩を作った、という序の内容から、これが虚構の詩ではなく、體驗された離別の事件を踏まえて作られた離別の詩であることは明らかである。しかし、詩の内容容は、そうした離別の現場に即して展開されてはいない。作者は想像の力をかりて、別後の寂寞たる境遇の中にみずから

を描いてみせ、そこを起點に別れた友人を懷しむのである。

こうした離別の哀情を表現する様式が、先に唐詩で確認した成熟した離別詩の様式と異なるものであることは言うまでもない。むしろこの詩については、楚辭系の作品からの影響を讀み取るべきであらう。「兮」字を挿んだいわゆる騷體の型式もそうであるが、別後の寂寞の中で別れたよき人（美人）を思慕するという發想こそ、「離騷」に代表される屈賦の基調であつた。この點で言えば、この「離友詩」は唐代離別詩へと連續してゆくものではなく、むしろまごうことなく過去を向いた作品なのである。

これ以外の建安の離別詩では、應瑒の「別詩」をあげよう。

別詩二首（其一）

應瑒

朝雲浮四海 日暮歸故山

行役懷舊土 悲思不能言

悠悠涉千里 未知何時旋

（其二）

浩浩長河水 九折東北流

晨夜赴滄海 海流亦何抽

中國詩文論叢 第九集

遠適萬里道 歸來未有由
臨河累太息 五內懷傷憂

歲月無窮極 會合安可知
願爲雙黃鵠 比翼戲清池

この詩は、唐代離別詩の様式と重なる部分をもっている。「別詩」とはあってもいい誰と別れたのか、作品からは具體的なイメージは浮かんでこない。おそらくは漠然と、故山と、故山ふるさとの人たちに別かれたことを言うのであろう。むしろ離別の相手を曖昧化しているのだから、離別の事件がそのときの情景とともにリアルに描かれることもない。要するにこの「別詩」は、「古詩十九首」にも繰り返し詠じられているような遊子うし、嘆を述べた作品であって、離別詩の新たな出發を示すような作品とはなっていないのである。

さらに、徐幹には次のような詩がある。

於清河見挽船士新婚與妻別詩 徐幹

興君結新婚 宿昔當別離
涼風動秋草 蟋蟀鳴相隨
冽冽寒蟬吟 蟬吟抱枯枝
枯枝時飛揚 身體忽遷移
不悲身遷移 但惜歲月馳

挽舟の苦役に徴用される若者が新妻と別れるのを見ての作ということだが、例えば杜甫の「新婚別」に表されているような現実感も、また政治に對する指弾もない。この詩は、詩題に示された新しい意慾にも拘らず、結果としては樂府にしばしば詠まれてきた傳統的な閨怨の主題を、これもまた傳統的な手法によって處理してみた作品となっている。従って、これを離別を主題にした作品と言うことはできても、唐代離別詩の様式に發展的に結びつく要素を見出すことはできない。

以上のように建安期の主要な離別詩を瞥見して得た結論は、建安期の離別詩には、まだ安定した表現様式が備わっていないかった、と言うことである。換言すれば、離別という事件が惹き起こす感動を、どのようなものとして、どのように表現しているのか、建安の詩人たちはまだ定かには知らなかったのである。ある場合には、別れの情感を、棄婦のイメージの中に投射し、または傳統的な遊子の嘆きへと客體化した。そしてある場合は曹植の「送應氏詩」のように、一回的に體驗

された離別の事件に密着する中で、直截に悲哀を表現してみせることもあった。しかもさらに重要なのは、その中のいずれを選択する場合でも、詩人にはそれを選びとる明確な自覺、つまり離別詩の制作を様式として方法化しようとする確乎とした意志がなかったということであろう。だからこそ、同じように具體的な離別という事件を前にしながら、曹植は表現の仕方を変えて「送應氏詩」も「離友詩」も書いてしまうのである。要するに、この時期の離別詩は、様式が問題とされるまでには、まだ質量ともに成熟していなかったのである。

(四)

西晉期に離別の詩がどのような状態にあったかを知るうえで、「祖」―「祖道」―と題された一群の離別詩（以下これを祖道詩と呼ぶ）の存在が重要になる。ここで祖道詩が注目されるのは、これに二つの目立った特徴が認められるからである。一つは、おおよそ西晉期に限って祖道詩が作られていること。そして二つには、西晉期の離別詩（離別を明示する詩題をもった詩、21題35首）において、實に三分の二の大きな部分をこの祖道詩（14題24首）が占めていることである。つまり西晉に限っては、祖道詩が離別詩の中心となっていた。

六朝期における離別詩の形成（上）（松原）

西晉期の離別詩を考察するうえで、とくに祖道詩を取り上げる必要が認められるのはこのためである。
まずこの時代の祖道詩がどのようなものか見當をつけるために、張華の「祖道趙王應詔詩」を引いておく。

祖道趙王應詔詩

張華

崇選穆穆 利建明德 於顯穆親 時惟我王
稟姿自然 金質玉相 光宅舊趙 作鎮冀方
休寵曲錫 備物煥彰』

發轍上京 出自天邑 百寮餞行 縉紳具集

軒冕峨峨 冠蓋習習 戀德惟懷 永歎弗及』

前半十句が趙王に對する贊辭、後半八句が朝廷をこぞっての盛大な餞別の光景を描いている。この詩の體裁上の特徴として、應詔の詩、つまり天子の下令を承けて制作された詩であること、そして當時流行の五言詩ではなく、詩經以來の典雅な四言詩であることを指摘しておきたい。この二つの特徴は、この詩だけにとどまらず西晉期の祖道詩の大部分にも共通したものである。

次に西晉期の祖道詩の詩題を掲げておく。

中國詩文論叢 第九集

○王濬 祖道應令詩

○孫楚 祖道詩

之馮翊祖道詩

○張華 祖道征西應詔詩

祖道趙王應詔詩

○何劭 洛水祖王公應詔詩

○陸機 祖會太極東堂詩

元康四年從皇太子祖會東堂詩

祖道清正

祖道畢雍孫劉邊仲潘正叔詩

○陸雲 太尉王公以九錫命大將軍讓公將還京邑祖餞贈此詩

六章

大安二年夏四月大將軍出祖王羊二公於城南堂皇被

命作此詩六章

○牽秀 祖孫楚詩

○王讚 侍皇太子祖道楚淮南二王詩

右にあげた十四題（二十四首）の中で、五言詩は陸機の「祖道畢雍孫劉邊仲潘正叔詩」の一首のみであり、他はすべて四言詩となっている。西晉というすでに五言詩が大勢を占

めていた時期において、しかも複数の詩人がそれぞれ異なる場において制作した祖道詩が、結果としてこのように殆ど四言詩に統一されているのは、はなはだ不自然なことである。そこには特別な人爲的要請ないしは強制力がはたらいていたことを想定してよいであろう。

またこのことと関連して、祖道詩に多くの應詔詩が含まれていることも看過されてはなるまい。十四題のうちの五題に「應令」「應詔」「被命作此詩」など下命を承けて制作されたことが明記されており、またこれ以外のものでも陸機の「祖會太極東堂詩」のように朝廷の公的宴席に侍しての作とわかる詩がいくつもある。むろんこうした公的侍宴の作には、下命の有無に拘らず、制作すべき儀禮的要請が伴っていたと考えるのが當然であろう。

こうした四言詩への集中と、應詔詩系作品の占める割合の高さは、總じて西晉の祖道詩が、離別に際しての自發的感動によるのではなく、むしろ形式的儀禮的な動機で作られたものであることをよく示唆するものであろう。しかもこうした推測には、別に有力な傍證がある。

魏晉期に流行したものに公讌詩がある。五臣、呂延濟の注に「公讌者、臣下在公家侍讌也」とあり、つまり公（朝廷）

の宴席に侍した臣が、そこでの交歓のさまを述べる詩のことである。

公讌詩が本來どのようなものであったのか、最初期の建安の作品から王粲のものを示してみたい。

公讌詩 王粲

昊天降豐澤 百卉挺歲穡
涼風撤蒸暑 清雲却炎暉
高會君子堂 並坐蔭華榭
嘉肴充圓方 旨酒盈金壘
管絃發徽音 曲度清且悲
合坐同所樂 但慙杯行遲
常聞詩人語 不醉且無歸
今日不極歡 含情欲待誰
見眷良不翅 守分豈能違
古人有遺言 君子福所綏
願我賢主人 與天享巍巍
克符周公業 奕世不可追

この詩は、王粲が曹操の宴に侍して作ったものとされる。

六朝期における離別詩の形成(上)(松原)

公讌に侍しての制作であるから、おのずとある節度の中におさまってはいる。しかし「合坐同所樂、但慙杯行遲、常聞詩人語、不醉且無歸、今日不極歡、含情欲待誰」、一座の者はともにたのしんで、ただ杯の渡るのが遅いと不満をもらす。御存知の通り、詩經にも、酔わずんば歸らずとある。かりにも存分にたのしめなければ、いったい不満を誰にぶつけたらよいのか——と語る部分では、典故を上手に踏まえることで古典的節度を保ちながらも、交歓の情景を活々と描寫することに成功している。かりにこの宴席に連なった者には、交歓の實をあげたことを示すのが幾分かは主人への社交辭令として求められていたとしても、その場合でも、宴の目的はやはり君臣の交歓にあった。この詩に漲るのびやかな精神の高揚感、巧まらずしてこのことを證明してみせている。建安期の公讌詩は、おおむねこのように闊達なものであった。これに對して、西晉の公讌詩はどうであらうか。

皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩 陸機

三正迭紹 洪聖啓運 自昔哲王 先天而順

羣辟崇替 降及近古 黃暉既澈 素靈承祐

乃眷斯顧 祚之宅土 三后始基 世武丕承

中國詩文論叢 第九集

協風旁駭	天晷仰澄	淳曜六合	皇慶攸興
自彼河汾	奄齊七政	時文惟晉	世篤其聖
欽翼昊天	對揚成命	九區克咸	謳歌以詠
皇上纂隆	經教弘道	于化既豐	在工載考
俯釐庶績	仰荒大造	儀刑祖宗	妥綏天保
篤生我后	克明克秀	體輝重光	承規景數
茂德淵沖	天姿玉裕	蕞爾小臣	邈彼荒遐
弛厥負擔	振纓承華	匪願伊始	惟命之嘉

この詩も、前の王粲の公讌詩とともに『文選』卷二〇「公讌」に收められている。いずれも、その時期を代表する作品と評價されたものである。

詩題に見える皇太子とは西晉惠帝の子の愍懷太子であり、このとき陸機は太子洗馬として彼に仕えていた。詩からうける總體的印象は、蒼古として難解ということであろう。王粲の詩が措辭平明であったのと、對照的である。しかもこうした兩者の相違は、内容においてさらに著しい。この詩は通篇、晉室に對する贊辭に盡くされていて、宴會についての、例えば盛大な管絃とか、活潑な酒杯の應酬といった具體的な描寫がまったく缺落している。王粲の詩に描かれてひとときわ

精彩を放っていた列席者同士のうちとけた交歡の光景などは、この詩の雰圍氣とまったく無縁のもののように見える。

西晉期の公讌詩は、おおむねこれと大同小異であり、あたかもかしこまった郊廟歌辭や燕射歌辭を讀むような印象のものとなっている。

ところで、魏から西晉にかけてのこうした公讌詩の變化は、詩型にもあざやかに反映している。次に、魏・西晉期の公讌詩の詩題と詩型を記す。

〔魏〕

王粲	公讌詩（五言詩）
陳琳	宴會詩（五言詩）
劉楨	公讌詩（五言詩）
阮瑀	公讌詩（五言詩）
應瑒	公讌詩（五言詩）
侍五官中郎將建章臺集詩	（五言詩）
曹植	正會詩（四言詩）
	公讌詩（五言詩）

〔西晉〕

傅玄	宴會詩（四言詩）
張華	太康六年三月三日後園會詩四章（四言詩）

陸機 皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩（四言詩）

皇太子賜讌詩（四言詩）

陸雲 大將軍宴會被命作詩六章（四言詩）

征西大將軍京陵王公會射堂皇太子見命作此詩六章

（四言詩）

從事中郎張彥明爲中護軍奚世都爲汲郡太守客應作

各將之官大將軍崇賢之德既遠而厚下之恩又隆非

應作悲此離析有感聖皇既蒙引見又宴于後園感鹿

鳴之宴樂詠魚藻之凱歌而作是詩六章（四言詩）

嵇含 臺中宴會詩（七言詩）

阮脩 上巳會詩（四言詩）

王讚 侍皇太子宴始平王詩（四言詩）

皇太子會詩（四言詩）

潘尼 七月七日侍皇太子宴玄圃園詩（四言詩）

上巳日帝會天淵池詩（四言詩）

皇太子集應令詩（五言詩）

以上から一瞥して知られることは、魏の公讌詩の大部分が五言の詩型であったのが、西晉には殆どが四言詩となっていくことである。また詩題の内容もより具體的なものに變化し

ているが、その中でもとくに、「有令賦詩」「被命作詩」「見命作此詩」「應令」のように下命を承けての作と明記するものが西晉には四首もあることに注意を向けたい。

公讌詩のこのような急激で徹底した變化からは、その背後にはたらいっている西晉王朝の意圖をかなり正確に讀み取ることができらるだろう。西晉が、後漢の末から三國へと續いた分裂狀態を政治の上で統一したときに、その統一を文化の領域にまで及ぼし、これを朝廷を中心に秩序づけようと試みることは十分に考えられる。おそらくはこうした狀況の變化に對應して、公讌詩は、それまでのいわば無禮講の交歡を歌うものから、朝廷の威儀をかしこみ讚美するものへと大きく變質したものと判斷される。

そして西晉における祖道詩の出現も、この一連の動きの中で説明できるのである。政府の高官を送りだす祖道の宴會は、朝廷の威令を示す好箇の機會でもある。詞臣たちが作ることになった四言の典雅な祖道詩は、離別の哀傷を詠ずるといふ離別詩本來のあり方から逸脱して、もっぱら朝廷の意を迎えて、祖道の盛會に華をそえる手段となることが期待されていたのである。

公讌の大きな變化と祖道詩のにわかな出現。しかも兩者に

共通して見られる朝廷の贊美、四言詩への偏向と應詔詩系作品の割合の高さなどを突き合わせて考えるならば、これ以外の解釋の餘地は殆どないと言つてもよいだろう。

ところで西晉に現れて、西晉の滅亡とともに消えていった祖道詩は、離別詩の形成史の中にどのような位置を占めるのであろうか。

このことに關しては、正負兩面からの評價が必要になる。まず祖道詩がその後の離別詩に與えた積極的な意味としては、離別を主題とする詩が、他のジャンル（例えば贈答・詠史など）と並んで一つの獨立したジャンルとなりうる可能性を示したことがある。離別詩が、立派に一つの詩の型となりうるという自信、つまり離別詩を離別詩と自覺しつつ制作する機運、をもたらしただけである。離別詩を離別詩としてとらえる意識がまだ萌芽状態に留まっていた建安期（また魏一代）の詩人と比べると、西晉の詩人は、はるかに自覺的に、つまり方法的・様式的に、離別詩（祖道詩）を作っていたからである。

ちなみにこうした正の評価の一斑を伝えるものとして、『文選』がある。梁にこれが編まれたとき、離別詩の部門に「祖餞」の名稱が付けられている。つまりこのことは、西晉

に（また西晉に限って）流行した祖道詩が、離別詩の重要な源流の一つの典型として無視しえぬ存在と意識されていたことを示すものだからである。

しかし一方で、祖道詩はそれ自身の内部に大きな限界を持っていた。このことは、祖道詩が成立の當初から、離別の自然な感動とは距離をおいたところで、はなはだ人爲的に作られた離別詩であったことに由來している。このことの當然の結果として、文學作品としてはどうしても瑞々しい感情の發露に缺けた低調なものが多くなってしまうこと。また朝廷の支持を失うとともに消え去るべき運命を持っていたことである。要するに、人工的な苗床で育った祖道詩には、旺盛な活力が缺けていたのである。

西晉期の祖道詩は、このように正負兩面の評價を受けるべく、離別詩の歴史の最初期に位置しているのである。

(五)

西晉が永嘉の亂の中で滅亡して、ついで江南に東晉（三一七～四二〇）が建てられる。この東晉百年間は、離別詩の低迷期であり、作品數自體も少なく、また作品内容や様式上も見るべき變化を示していない。西晉期にさかんに作られた祖

道詩も、それを支える朝廷の權威の衰えとともに消滅していった。こうした低迷を脱して離別詩が新たな動きを見せはじめるのは、次の宋（四二〇～四七九）になってからである。

劉宋の離別詩で重要となるのは、謝靈運と鮑照の二人である。まず謝靈運から取り上げる。

北亭與吏民別詩 謝靈運

刀筆愧張杜 葉繡慙終軍
貴史寄子長 愛賦託子雲
昔值休明初 以此預人羣
常呼城旁道 更歌憂逸民
猶抱見素樸 兼勉擁來勤
定自懲伐檀 亦已驗惟塵
晚未牽餘榮 憩泊甌海濱
時易速還周 德乏勤濟振
眷言徒矜傷 靡術謝經綸
矧乃臥沈疴 鍼石苦微身
行久懷邱窟 景昊感秋旻
晏秋有歸棹 長景無淹津
前期眇已往 後會邈無因

六朝期における離別詩の形成（上）（松原）

貧者闕所贈 風寒護爾身

この詩は、永嘉郡の太守の職を病と稱してやめて故郷に歸るとき、當地の吏・民に示した留別の作である。⁽⁹⁾

この詩が注目されるのは、「與吏民別」という詩題の、またそうした主題の設定のしかたにある。地方官となっていた詩人が、別れに臨んで任地の下僚や民衆に留別の詩を示す、という形で離別の詩が作られるのは、現存する作品について見るかぎり謝靈運のこの詩を最初とする。しかもつづく齊梁期にもこの詩を模した「別吏民」の作品を系統的に辿ることができるのである。

謝朓 忝役湘州與宣城吏民別詩

沈約 去東陽與吏民別詩

蕭綱 罷丹陽郡往與吏民別詩

蕭繹 別荊州吏民詩

別荊州吏民詩二首

もつとも、謝靈運が創出した「別吏民」という形の離別詩が齊梁期の詩人たちに影響を与えたとはいっても、その影響

自體は、いわば皮相的・外形的なところとどまっている。この事實をもつて、離別詩の本質的な發展と見ることはできない。この詩でむしろ重要となるのは、離別詩が社交（社會的な人間の諸關係）の中で次第にもてる機能を發揮しはじめた、ということであろう。つまり離別詩が「役に立つ詩」になつてきたのである。

一般に古典詩というものは、純粹に文學作品であるばかりではなく、一面では社交に不可缺の手段として、社會的機能をも擔うものだったと考えられる。離別詩も例外とはなりえず、これが安定したジャンルとなつていた唐代について見れば、友人や同僚を送る送別の宴に、送別の詩はいわば手土産として持參されるべきものであった。また寄贈の詩にしても、友情を確認し、良好な人間關係を保持するために、少なからぬ役割を果していたと考えて差し支へあるまい。こうした社會的機能は、限ずしもその當の作品の文學的價值を減殺するものではなかったし（理窟としては、優秀な作品ほど社會的機能をいっそう有効に遂げることが期待できた）、またこうした必要から多くの作品が競作されることで、その裾野の廣がりが一部の作品をいっそうの高みに押し上げることもありえたであろう。古典詩が社會の内部で果した機能の細部

については今後の精密な検討が俟たれるとしても、ただ、いわゆる現代詩が、社會的機能を希薄にして文學作品へと純化されているのとは、古典詩は結果においても、また制作動機においても大いに徑庭があることまでは言つてよいのである。

離別詩の見方にも、このような觀點が求められるであろう。一面として確かに、詩經の時代から建安期に至るまで、離別詩は、離別の感動の極まるところで作られてきた。しかし離別詩が、古典詩の世界の中で安定したジャンルとなり、持續して作品が生み出されるには、さらにそこに社會的機能の附加が必要であつた。また離別のどのような感動を、どのように表現するのかという様式的課題も、その社會的機能の方向に即して解決されるものであつた。こうした觀點から謝靈運の「北亭與吏民別詩」を見ると、離別詩が新しい段階にさしかかっていることを示すものとして、この詩を位置づけ必ておく必要があるだろう。

(六)

鮑照は、それまでの歷代の詩人の中では最も多くの離別詩を傳えている。しかもその離別詩は、「擬行路難」などの樂

府とともに、彼の文學の中の最も重要な部分をなしている點で、いっそう注目すべき作品群となっている。

鮑照の離別詩を考察する順序として、まずその詩題を掲げる。

○吳興黃浦亭庾中郎別詩

○與伍侍郎別詩

○送別王宣城詩

○送從弟道秀別詩

○贈傅都曹別詩

○和傅大農與僚故別詩

○送盛侍郎餞候亭詩

○與荀中書別詩

ところで鮑照がこの時期において傑出した離別詩の作者となりえたのは、彼の文學の特質を總體として理解したうえで、その中に離別が占める位置を考えてみるならば、いわば必然ともいえるものであった。つまり鮑照は、離別詩を片手間ではなく、自己の文學の核心的なところで作ろうとしていたのである。

六朝期における離別詩の形成（上）（松原）

鮑照は、彼と併稱される謝靈運が、瑯琊の王氏とともに南朝に力をふるった謝氏の一族であったのと比べるまでもなく、この時期に名を成した詩人の中では例外的に寒門の出であった。「上品に寒門無く、下品に盛族無し」（『晉書』劉毅傳）と公言されてはばからなかった當時の社會の中で、彼は生涯を地方まわりの小官として過すほかなかったのである。こうして彼の文學の基調となったのは、下級官吏に沈淪することへの不遇感であり、またこれが具體的な形を取るときには、例えば、都を遠く離れた邊地に留まることからくる羈旅の嘆きとして表現されることになった。

またこれと關連して注目されるのは、彼の代表作「擬行路難十八首」をはじめとする樂府である。一般に樂府は、自己の體驗を直截に反映するのではなく、いわば冷靜な第三者の視點を借りて制作されるものであった。⁽¹⁰⁾しかし鮑照にあっては、樂府も彼自身の不遇感を表現すべき場となっていた。彼の樂府を讀むときひときわ強く感じられるはりつめた緊迫感⁽¹¹⁾は、こうした特質に由來するものであろう。また、彼以前にはおそらく流行を見ていなかった樂府「行路難」についてあえて十八首もの多量の模倣作「擬行路難」を作っていることも、その樂府題の選擇の次元においてすでに、これを自己の

體驗表現の手段に用いようとする自覺があつたことを示唆するものとして注目しておきたい。「行路難」は、樂府の題意を説明する唐、劉餗の『樂府解題』（『樂府詩集』卷七〇所引）によれば「行路難、備言世路艱難及離別悲傷之意」とあるからである。

こうした樂府も含めて彼の文學全體に底流する基調は不遇感の表白は、離別詩において決定的な形で現わされてくる。鮑照の離別詩は、いわば體驗告白の作としての色調が濃厚である。彼の離別は、いつも、不遇の思いをつのらせる地方の任地を舞臺とし、また多くの場合、彼によって送られるのは彼をおいて榮轉してゆく羨しい友人だった。鮑照は、こうした情況を着實に踏まえつつ、その離別詩を作ろうとしてゐる。つまりその離別が、誰との間で、何處において、どのような時間の中で起こったかということが、その一回的な離別の事件に密着して描き出されるのである。こうした傾向は、彼の八首の離別詩に共通しているが、これは、それまでの離別詩が時としてこの方向を目差しながらも徹底しきれなかつたものであつた。

このように作品を作つた鮑照の意圖は、おそらく、作品に扱われるこの離別に對して、一回的に體驗される事件として

のリアリティーを與えることにあつたのだろう。つまり、その體驗的事件を讀者と全く共有しうるようにな作品の中に着實に再構成することによって、そこにおのずから自己の離別の悲傷をあらわにすること、そしてこのような悲しい離別に遭わなければならない自己の不遇をあらわにすることにあつたのだろう。

換言すれば、鮑照の離別詩に描かれているのは、戀人に去られた女性の嘆きとか、故郷をはなれてさすらう遊子の嘆きのように樂府詩の中で類型化された離別のイメージでもなければ、また曹植「離友詩三首」に見られるような別後の寂寞たる心境でもなく、いままさに離別と直面している者のその時の悲傷なのである。つまり、離別という事件のリアリティーを高めることで、離別の悲傷をその頂點において表現しようとしたのが、鮑照の試みた新しい離別詩だったのである。ではこのような理解をふまえて、實例を見てみたい。

吳興黃浦亭庾中郎別詩

吳興の黃浦亭にて庾中郎と別るるの詩

鮑照

風起洲渚寒

風起こりて洲渚寒く

雲上日無輝

雲上 日 輝く無し

連山眇煙霧 連山 煙霧に眇かに
 長波迴難依 長波 迴にして依り難し
 旅雁方南過 旅雁 方に南に過ぎんとして
 浮客未西歸 浮客 未だ西に歸らず
 已經江海別 已に江海の別れを経
 復與親眷違 復た親眷と違ふ
 奔景易有窮 奔る景は窮る有り易く
 離袖安可揮 離るる袖は安ぞ揮う可けん
 懽觴爲悲酌 懽觴は悲酌と爲り
 歌服成泣衣 歌服は泣衣と成る
 溫念終不渝 溫念 終に渝らず
 藻志遠存追 藻志 遠かに存して追さん
 役人多牽滯 役く人に牽滯多く
 顧路慙奮飛 路を顧ては奮飛するものに慙ず
 昧心附遠翰 昧なる心を遠かなる翰に附せ
 炯言藏佩章 炯なる言を佩ぶる章に藏せん

この詩は後半において、いかにも六朝風の修辭主義や、またその結果としての繁縟な表現を見せている。とりわけ「懽觴爲悲酌、歌服成泣衣」の對句などでは、「觴」と「酌」、

「服」と「衣」が同語反復を感じさせて、いかにも密度のうすい對句、あるいは對句のための對句といった印象を免れていない。要するに、古めかしい風情の詩なのである。

しかしこの離別詩を個々の字句表現をはなれて様式的視點から捉えなおしてみると、それまでの離別詩には見ることでできなかった新しい試みを發見することができる。それは、冒頭の數句に展開されている風景描寫である。

劉宋の鮑照に至るまでの詩人たちは累積すれば必ずしも少なくはない離別詩を作ってきたが、それらを通觀して感じられるのは、彼らは離別の事件のただ中にあるとき、その周圍に廣がる風景を眼に入ることが殆どなかったのではないかと思われることである。それほどに、離別詩に風景が詠じられるのは稀だったのである。とはいえ、それまでの離別詩に風景描寫が皆無だったわけでもない。

○山川阻且遠 山川は阻くして且つ遠く
 別促會日長 別れは促るも會う日は長かなり

(魏)曹植「送應氏詩二首」其二、部分)

○晨風飄歧路 晨の風は岐れの路に飄り
 零雨被秋草 零つる雨は秋草を被う

中國詩文論叢 第九集

傾城遠追送
城を傾けて遠く追ひ送り
餞我千里道
我を千里の道に餞けす

(西晉、孫楚「征西官屬送於陟陽侯作詩」部分)

○秋日淒且厲
秋の日は淒しく且つ厲しく
百卉具已腓
百の卉は具に已に腓れぬ
爰以履霜節
爰に霜を履むの節を以て
登高饒將歸
高きに登りて將に歸らんとするものに餞

けす

寒氣冒山澤
寒き氣は山と澤とを冒い
遊雲倏無依
遊るる雲は倏ちに依る無し
洲渚思綿邈
洲渚に思ひ綿かに遼けく
風水互乖違
風水に互ひに乖き違る
瞻夕欣良譙
夕を瞻て良き譙を欣ぶも
離言聿云悲
離れの言は聿に云に悲しむ
晨鳥暮來還
晨の鳥は暮に來たり還り
縣車歛餘暉
縣車は餘れる暉りを歛む
逝止判殊路
逝くと止まると判かに路を殊にす
旋駕悵遲遲
駕を旋せば悵しみて遲遲たり
目送回舟遠
目に回る舟の遠ざかるを送れば
情隨萬化遺
情は萬化に隨いて遺る

(東晉、陶淵明「於王撫軍座送客詩」全文)

曹植のものは、風景というには餘りにも斷片的である。これが孫楚に至ると、離別の場を取りまくふくらみのある情景となっている。別れの朝に風がきびしく吹き、雨が秋の野原の草に降るといふ情景は、おそらく實景であると同時に、離別の心象風景ともなつて、離別詩に効果的に奥ゆきを與えている。しかしこの部分だけを取り出して風景描寫としてみるならば、やはり短促にすぎても不十分な表現と言わなければなるまい。

ところが陶淵明になると、事情は大きく變つてくる。離別の情は、秋の風景とともにのびやかにのべられ、風景は離別の情を帯びて悲しげにかげりをもつ。この時期の離別詩における紋景としては、群を抜いて豊かな内容を持つてゐる。とはいへ、紋景の方法は、さきの鮑照のものと微妙なところでしかし大きく異つてゐるように思える。陶淵明の風景は、目睹された實景というよりも、風景の形をとつて外在化された觀念とでも言うべきもののような印象を與えるのである。

たとえば冒頭の「秋日淒且厲、百卉具已腓」では、秋という季節に對して懷く凋落の觀念がこの二句を生み出したので

あつて、實際に花々が枯れ萎んだのを見ての具體的描寫とは思えない。つまり、風景ではない。また「寒氣冒山澤、遊雲條無依」では、前句は大把みな表現ながらも實景であるとして、後句の遊雲は、いわば無常住なるものの象徴としての雲であり、やはり實景である以上に觀念の產物と考えるべきものである。「晨鳥暮來還」にしても、「飲酒詩」に「山氣日夕佳、飛鳥相與還」、また「歸去來辭」に「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」と類似表現をもつように、鳥は無爲自然の營みの中に還るものの象徴であつて、かりに實景であつたとしても、この觀念によつてどこまでも深く滲透された、通常言われるところの景物とは明らかに異質なものなのである。そして最後の句「情隨萬化遺」に至ると、そこでは秋の風景も、去りゆく人も、また彼との別れを惜しむ思いもが、すべては無爲にして變化しつづけるもの（萬化）として一括され、作者はここにおいて人としての情を遺れ、萬化に従つて無爲の營みのもとに還ろうとする。つまり描かれた風景は萬化の象徴なのである。このように考えてみると、陶淵明の描く風景は、ある程度まで實景を反映しているとしても、それは同時に觀念の色彩を強く捺染されたものであり、端的には、外在化された觀念と言ふべき性格のものであるように判斷される。

六 朝期における離別詩の形成（上）（松原）

る。そしてまさしくこの點で、鮑照が描くのが風景であり、それ以上でも以下でもないのと大きく異なるのである。

このように見てくると、鮑照が離別詩においてまとまつた規模の風景描寫を試みていることは、無視できない重みをもつことがわかつてくる。しかも離別詩がジャンルとして確立されていた唐代の作品において風景描寫は、離別の抒情に重要な役割を果していることも考えあわせるならば、鮑照が試みたところの離別詩における敘景の意味が、ここでは少し掘り下げて考察される必要があるやうである。

ところで鮑照の離別詩に現れた敘景については、二つのアプローチが考えられる。一つは、中國古典詩にあらわれた敘景の發展、もしくは自然觀の形成という觀點からこれを位置づけようとするもの。もう一つは、あくまでも離別詩の側から、これを離別詩に現れた新しい機能として理解しようとするものである。離別詩を形成史的に考えようとする本稿において、基本的にとるべきは後者のアプローチであらう。

では鮑照のこの詩で敘景が果たしている機能は何かとなるかと、一口で言へば、離別の情況を一元化する機能ということができるであらう。換言すれば、扱われた離別が、他のものではなく、ここで一回的に體驗された事件であることを確定

し強く印象づけるために敍景が効果的に用いられているということがある。

鮑照が友人の庾中郎を見送るのは、詩題によれば吳興（浙江省湖州）の黃浦亭である。しかし當地を知らない者には、江南の水邊にちかい亭が離別の場となったことが漠然と思ひ浮かべられるにすぎない。またかりにこの地を知る者であっても、これを取りまく情況によつて亭はいくらでも刻々とその印象を變えるものであらう。さらにいえば、この時作者とともに亭に居合わせた者であっても、人がちがい離別に寄せる思ひがちがえば、亭は異なる意味で受け取られているはずである。つまり「吳興黃浦亭」は離別の一瞬に向かつて尖鋭化した心情を形容するにはあまりにも曖昧な概念であり、離別の情況設定として十分ではないのである。詩に描かれるべき離別の情況を、友人庾中郎を見送るその場の、その時の情況として一つに確定するために、ここで敍景が効果を發揮することになる。

離別詩における情況設定としての敍景は、第一義的には、自らを敍べることに於いてではなく、むしろ他の情況になる可能性を排除し否定する點において意味を持つと考えられる。冒頭の「風起洲渚寒」を取りあげれば、「風が吹き起こ

つて江の中洲がこごえるように見える」そのこと自體が大事であるよりも、「風がない」「中洲がない」「寒くない」といった様々にありうる可能性を一つ一つ排除することにこそ意味があるのである。このようにして、吳興の黃浦亭をめぐつて想定できる無數の情況を一つ一つ切り捨てることによつて、たった一つの情況だけをのこし、これに確定する。鮑照の離別詩に出現した敍景という敍述の手法は、離別詩の形成史においてみれば、このように離別の情況を一元化する機能を果たしたという點で重要な意味を持つと考えられる。

ちなみに、敍景を離別詩における情況設定の手段とみるこゝうした歴史的理理解に立てば、敍景が兼ねて離別の心象風景を構成するということは、一般に考えられていることとは逆に、敍景の副次的、第二義的な機能にとどまると言うべきなのである。もしそれでも離別詩の敍景の意義を抒情レベルにおける心象風景として捉えうるとするならば、それは離別詩において敍景が日常的に多用される唐詩を基準にした場合に可能なのであつて、こうした理理解の仕方は、六朝離別詩に即した歴史的理理解とは異質なものと言つてよからう。

鮑照は、このように離別詩に敍景を取り入れるることによつて、自らの體験した別れを、一般化・典型化して描くのではな

く、むしろあくまでも一回的な事件として詩に深く刻み込む方法を見出すことになった。こうして彼は、離別という事件のリアリティーを高めることを通して、離別の悲傷を、離別の瞬間のその頂点において表現する離別詩の新たな様式を發見したのである。それは唐代離別詩において完成する様式、すなわち、作者自身の、友人との別れを、別れの事件があったその時、その場の情況に即して描くという表現方法と、基本的に一致するものであった。⁽¹³⁾

[注]

(1) 李白「古風」其一に「自從建安來、綺麗不足珍」、など。

(2) 送別詩と留別詩をあわせて、離別詩とする。

(3) 唐詩においては、題材およびその表現處理の方法、つまり様式、の傾向性によって、いくつかジャンル(部門)が形成されていた。詩のジャンル別編集を實踐した『分類補注李太白詩集』によれば、古風・樂府・歌吟・贈・寄・別(留別)・送・酬答・遊宴・登覽・行役・懷古・閑適・懷思・感遇・寫懷・詠物・題詠・雜詠・閨情・哀傷の二十一のジャンルが立てられている。

(4) 詩題によって離別詩をさがす場合、「送・別・餞・祖」などの字の使用を目安とする。それぞれの詩集に占める離別詩の割合を『全唐詩』によって示せば、孟浩然(49/267 卷159)～

六朝期における離別詩の形成(上)(松原)

160)・王昌齡(49/183 卷140～143)・岑參(146/401 卷198～201)・高適(69/243 卷211～214)。

(5) 漢魏六朝期の詩と詩題については、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、一九八三)によって記す。

また離別詩を数えるときは、詩題によって離別詩とわかるものは、斷片として傳わるものもこの中に数える。以下これにならう。

(6) 連作の其一、其三、其四を左に掲げる。

I 昔我從元后 整駕至南鄉 過彼豐沛都 與君共翱翔

四節相推斥 季冬風且涼 衆賓會廣坐 明鐙煌炎光

清歌製妙聲 萬舞在中堂 金壘含甘醴 羽觴行無方

長夜忘歸來 聊且爲太康 四牡向路馳 歡悅誠未央

III 秋日多悲懷 感慨以長歎 終夜不遑寐 叙意於濡翰

明燈曜閨中 清風淒已寒 白露塗前庭 應門重其關

四節相推斥 歲月忽已殫 壯士遠出征 戎事將獨難

涕泣灑衣裳 能不懷所歡

IV 涼風吹沙礫 霜氣何皚皚 明月照綈幕 華燈散炎輝

賊詩連篇章 極夜不知歸 君侯多壯思 文雅縱橫飛

小臣信頑固 僣俛安能追

(7) 例外として王粲の「贈蔡子篤詩」は、離別を正面に示えることで、内容上、殆ど離別詩と見做しうる。左に全文を掲げる

贈蔡子篤詩

王粲

中國詩文論叢 第九集

翼翼飛鸞 載飛載東 我友云徂 言戾舊邦 舫舟翩翩
以泝大江 蔚矣荒塗 時行靡通 慨我懷慕 君子所同
悠悠世路 亂離多阻 濟岱江衡 遡焉異處 風流雲散
一別如雨 人生實難 願其弗與 瞻望遐路 允企伊佇
烈烈冬日 肅肅淒風 潛鱗在淵 歸鴈載軒 苟非鴻鸛
孰能飛翾 雖則追慕 予思罔宣 瞻望東路 慘愴增歎
率彼江流 爰逝靡期 君子信誓 不遷于時 及子同寮
生死固之 何以贈行 言賦新詩 中心孔悼 涕淚涕洟
漣爾君子 如何勿思

(8) 連作の其一を左に掲げる。

步登北邙阪 遙望洛陽山 洛陽何寂寞 宮室盡燒焚
垣牆皆頽擗 荊棘上參天 不見舊耆老 但覩新少年
側足無行徑 荒疇不復田 遊子久不歸 不識陌與阡
中野何蕭條 千里無人煙 念我平常居 氣結不能言

(9) この詩は謝靈運の本集に收められておらず、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』によれば、『永嘉縣志』22、『太平寰宇記』99に載せられているとある。

(10) 樂府の表現機能については、松浦友久「樂府・新樂府・歌行論——表現機能の異同を中心に」(同『中國詩歌原論』一九八六、大修館書店)参照。

(11) 『樂府詩集』には、鮑照に先行する「行路難」の擬作を収めていない。

(12) 六朝離別詩における紋景を、主に紋景手法の發展という側

面から分析したものに戸倉英美「別れの詩の時間と空間」(同『詩人たちの時空——漢賦から唐詩へ』平凡社選書、一九八八)がある。

(13) 鮑照の離別詩には、上述のような情況の一元化を目差しながらも、なおこれに徹底しきれていない作品も存在する。

送盛侍郎餞侯亭詩

霑霜襲冠帶 驅駕越城闔 北臨出塞道 南望入鄉津
高塘宿寒霧 平野起秋塵 君爲坐堂子 我乃負羈人
欣悲豈等志 甘苦誠異身 結涕園中草 憔悴悲此春
右の詩では、初めの六句が叙景であり、「霜」がおき、「寒

霧」がたれこめ、「秋塵」が起ることが描かれ、離別の時が秋であることが明示されている。しかし末聯に「園中を歩しては草に涕をおとし、やつれた私は、君のいない春を悲しむだろう」と述べるにおよんで、離別の悲傷は、離別の瞬間に凝縮しきれずに、秋から春にむかう大きな時間の流れの中に散漫に擴張されてしまう。離別の情況の一元化という點で、これは少なからぬ後退と言ってよからう。また「北臨出塞道、南望入鄉津」の部分も、對句を構成する必要のためであるが、旅立つ盛侍郎の行方を曖昧にし、結果として離別の情況を不分明なものにしている。

こうした離別の情況の明確化・一元化において不徹底な部分が整理されて、離別詩に安定した様式が確立されるには、さらに齊梁期における試行錯誤を経なければならなかった。